

ヤスクニ・レポ 158
平和を創(つく)り出すために
—ヨーロッパの<11.11>に思いを馳せて
代表 西川重則

1

最近、戦争と平和の問題を考えることが多い私である。戦後67年の今、国会はもちろんのこと、院外においても、戦争をめぐる議論が多いのに驚いている。マスコミも例外ではない。前回の「つどい」に、石原都知事の発言で「(中国と)『戦争も辞さない』」云々や「朝日新聞」の「戦争前夜」云々の報道を始め、最近の週刊誌では公然と戦争肯定と思われる大きな見出しが目につく。

そうした現状を知るにつけ、私は日本の有識者がもう少し冷静に事柄の重大性を意識して納得のゆく発言をして欲しいと願っていることを強調したい。そうした思いに包まれている私にとって、忘れ得ない発言、表現がなされていることに気づかされ、改めてここに報告したい。いや是非報告し、参考に供したいと思った次第である。

それは、私と同じ教派の親しい友人であるが、いわゆる官僚のひとりとして長くヨーロッパに派遣されていた時のことである。親しい信頼すべき友人であるので、しばしば文通していたので、彼がジュネーブにいた頃、当然のことであるが、宗教改革の影響を強く覚えている教会に、彼は主の日の礼拝を守っていた。その彼が、毎年11月11日がくると、ジュネーブの教会はもちろんだが、ヨーロッパの教会は、その日について礼拝の参加者のために、戦争の悲惨さ、平和の大切さを御言葉によって解き明かし、参加者に強く訴えるということを文通に書いてくれたものである。

言うまでもなく、11月11日は、ヨーロッパでは当たり前なことだが、1914年から1918年に至る5年有余にわたっての第一次世界大戦が終わった記念すべき日である。日本でも<11・11>を世界平和記念日と書いているカレンダーがある。

とにかくヨーロッパの人々にとって、第一次世界大戦がいかに無意味な戦争であったのか、愚かな戦争がどうして長く続いたのか、どうすれば早期に戦争を止

めさせることができたのか、私たちはどうすべきだったのか、その責任と課題は何なのかなどについて、真剣に考えているのであろう。

友人の彼がジュネーブにいたことからジュネーブの教会で、熱心に礼拝を守っていた、その教会の牧師の力強い平和への思いが私にも通じるように手紙を送ってくれたことを今、ここで改めて感謝しつつ、ペンを走らせている私である。

11月11日について、たとえば、英語で Remembrance Day [Sunday] と言われているが、英和辞典で「11月11日に最も近い日曜日」と解説している(研究社の『新英和中辞典』、1273頁、参照)。日常の用語として使われていることから、11月11日が近づくと、一番近い主の日の礼拝で、牧師が右に述べたように、力強く平和の大切さについて御言葉に基づいて説教されるということである。

2

私たちの場合はどうか。ともあれ、ヨーロッパの教会は、第一次世界大戦を始め、第二次世界大戦についても戦争の問題、平和の問題を真剣に考える歴史の事実として、私がよく使っている、「記憶の継承教育」の一環として、とくに第一次世界大戦が終わった日(1918・11・11)その他を重要視し、今日に至っているように思われる。その一例として、私は、アメリカのブッシュ大統領が2003年3月20日にイラク戦争の開始を決定した前後に世界で何が起こったかを回顧している。時の首相、日本では小泉首相は日本の首相でありながら、日本の国会を無視して、2001年9月11日の、アメリカでの同時多発テロ直後、アメリカの大統領と戦争協力を話し合い、帰国する始末だった(西川重則著『有事法制下の靖国神社国会傍聴10年、わたしが見たこと聞いたこと』。「ワシントン大集会」、94、95頁、参照)。

私の参加も含めて、国際連帯の名の下、イラク戦争

直前のワシントンD. C. に50万人も集まり、戦争反対の大集会が開かれた。

また、2月15日、「世界で約60カ国、600以上の都市で、イラク戦争反対の平和デモが行なわれ、1000万人以上参加」と報じられている(中村政則・森武磨編『年表 昭和・平成史 1926—2011、岩波ブックレットNo.844』、86頁、参照)。

なお重要な報告として、アメリカのブッシュ大統領の要請にもかかわらず、ヨーロッパの多くの国々がイラク戦争に協力しなかったことである。第一次世界大戦の終結の〈11・11〉の教訓が心に刻まれていると言うのは過大評価であろうか。

ドイツの場合を例に挙げれば、日本と同じ侵略国だったドイツが敗戦となり、戦後初代の大統領が選んだ道は見事だった。ドイツが最初に外交問題として、侵略した最初の国、ポーランドと和解し、フランスとも同じ方法を取ったことであり、その成果のひとつが今日EUの歴史的誕生の源流としてのドイツの和解の歴史的な外交だったと言えよう。

日本は敗戦当時の吉田茂首相が、中国始め韓国の植民地支配に対する反省と、克服の道に専念せず、アメリカとの日米安保条約に道を開くことに関心を持っていたことを考えれば、同じ侵略国がなぜそれほどの相違が見られるのか。改めて今こそ根本的に考え直すべきことを痛感する私である。

今回私が改めて世界の国々が戦争の後の解決の道をどのように真剣に考えたか、日本のように、戦後67年の今もなお日米安保条約を最重要視しそれを基軸と位置づけ、今後の課題を考えるという日本的発想の根本的な理由はどこにあるのか、何が問題なのかを突き止める思想はいったい何なのかを問いたい。私がそのために百年近く前の歴史の事実である1918年〈11・11〉の出来事を今も忘れず、心に深く刻み、〈11・11〉に近い主の日に心をこめて、御言葉に基づき、平和を創(つく)り出すために説教し、共に平和創造を心に刻む時を持つ意味を考え、訴えたかったことを述べて終りたい(2012・11・11)。

2012年10月19日例会奨励「平和をつくる」

マタイの福音書5章11節 須田 毅牧師(日本福音キリスト教会連合西堀キリスト福音教会)

神が語られる「平和」は戦争状態がないことでない。神との交わりの豊かさに満たされ、人と人との交わりも豊かになることが、聖書の「平和」の筋道である。故に、キリスト者にとって平和の問題は伝道の問題でもある。説教者としては「具体的な平和の課題と共に、真の神が全てを治めておられることを、伝えて来たのだろうか」と、自問自答せざるを

えない。近年の諸教会において、平和の問題への取り組みが低調なのは、真の神を神とする説教の力が弱っているのではないか、とも思う。私たちは「神の子ども」とも呼ばれる。子どもとして父なる神を知り、依り頼む信仰によって、神との平和、人との平和をつくる道をしっかりと歩みたい。